社会福祉法人友愛学園
広報誌　VOL. 49
発行日　令和７年３月31日
発行人　社会福祉法人　友愛学園
〒198-0001　東京都青梅市成木2-107
電　話　0428-74-5453
ＦＡＸ　0428-74-6906
https://www.yuaigakuen.or.jp/

体験すること・創りだすこと

理事長　河津　英彦

令和７年になった。国内情勢も、国際情勢も不透明な中で新年を迎えた。

民主主義国家は世界で五割を切ったという。健全なデモクラシーではなく、エモーション（感情）がリーズン（理性）に勝る「エモクラシー」国家への変貌を危ぶむ論調も見られるようになった。日本の若者が使う「エモい」は、ある体験から得た何とも言い表せない素敵な気持ちを言うらしい。緩やかな共感である。

さて、堀口大学の聞き書き「日本の鶯」（岩波現代文庫）などで知られる関容子は「銀座であった人」（中公文庫）の後書きで、戦後間もない中学二年生の時、新任の女性教師から「人は何のために生きているのか」という出題を受け、書いた作文を載せている。

「毎日の暮らしは平凡でも、ふとした時に美しい音楽に出遭って心が震えたり、雨上がりの空に突然虹がかかって感激したり、恐い恐いと思っていた人の優しさがわかって涙が溢れたり、そういう日のために人は生きている。そうして年月を重ねながら人は何者かに近づいて行く。（後略）」関には十歳年上の兄がおり、学徒出陣から無事帰還している。大好きな兄との会話などから会得した人生観のようにも思えるが、一読して驚嘆した。中学生で気づいていたとは。

生きることにむなしさを覚え、生きる意味を追い求めていた私は十九歳の1月に、大学の課題図書であったエーリッヒ・フロムの「自由からの逃走」の中で次の一説に出会い、目が開かれたからである。「われわれの大部分は、少なくともある瞬間には、われわれ自身の自発性をみとめることができる。それは同時に純粋な幸福の時間である。一つの風景を、新鮮に自発的に知覚するとき、ものを考えているうちにある真理がひらめいてくるとき、型にはまらないある感覚的な快楽を感じるとき、また、他人にたいして愛情が湧き出るとき（後略）」

ユダヤ系のフロムはフロイトに学んだ心理学者であったが、ナチスドイツから逃れアメリカにわたり、第二次世界大戦勃発後の１９４１年にこの本を上梓している。自由の重荷に耐え兼ね、無力感の中から支配されることを選ぶドイツ国民の社会心理を分析した書として評価が高いが、私はより基本にある人の生き方を学んだ。

中学生の関も、学徒出陣の兄も社会人ではない。私も学生である。仕事も恋愛経験もなく創造的な関係に身を置いていない。それでも、気がつけば感動体験はあった。また、生きる意味は与えられるものではなく、生き方によって生まれることを学んだ。

友愛学園の利用者さんたちも様々な体験をしている。言葉には表せない感動体験もあるはずである。また、福祉作業所のように仕事に携わる人たちもおり、日中活動の中でアート活動を行う人もいる。真剣なまなざしで活動に集中している姿や、生み出された作品を見ると、ヴィクトール・フランクルの言う「創造価値」と思わざるを得ない。そして、作品から受ける私たちの感動は「体験価値」である。

フランクルもユダヤ系であり、強制収容所のアウシュビッツから生き残ったオーストリアの精神科医である。人間には３つの価値があるという。残りの１つが運命に対して向き合う、最後に残された人間の価値としての「態度価値」である。私は、青梅の成人部で癌の末期患者であった女性利用者が静かにデイルームに座っていた姿を思い出す。人間における３つの価値は平等にあると信じている。

成人部

令和6年度を振り返って

マスクを着用しない人を見ても違和感がなくなってきた令和6年、この一年を振り返ってみたい。

管理職になってからは、一年間で何人の利用者が退所したかを確認するようになった。令和6年度は1月末現在、3名の利用者が退所した。今までも退所した利用者との思い出があり、寂しさを感じてきた。特に今年度退所した利用者の2名については私と関わりが深く、感慨深いものがあった。

1名は児童部の時から支援をさせてもらい、卒業式にも出席させてもらった。児童部を退所後に家に戻ったが、数年後、成人部へ入所依頼があり、その時は成人部に勤務していた私が体験入所から施設入所までの窓口を担わしてもらった。途中で間が空いた期間はあったが、児童部の入所の時から成人部を退所するまでの四半世紀の間、彼の人生に関わっていた。

もう1名は、成人部に配属された際、最初にケース担当をさせてもらった利用者で、昭和44年に成人部が開所した年から入所していた。年齢は私より20歳も上であったが、どこか子ども心を持ったままの愉快な利用者であった。制度が様々と変わる時代であり、処遇計画が個別援助計画、そして個別支援計画に変わっていった。本人の思いをどのように具現化していくか、アイデアを出し、調整していくことを学ばせてもらい、成功も失敗も経験させてもらった。

成人部は入所者にとって生活の場であり、コミュニティーの場でもある。利用者にとって、慣れた場所で安心して生活できることは大切であり、ご家族の安心にも繋がっていると考えている。生活を継続していくためには『健康』が必要である。今年度、利用者の重度高齢化への対策を検討していくために、日々の生活の中で、利用者がどれくらい身体を動かしているのか、歩いているのか調べることを試みた。利用者に歩数計を付けてもらい、6月から12月まで、プレ計測期間を含め、5回の計測を行った。歩数の計測はうまくいかなかったが、日中活動中の個々の運動時間の確認を行うことに繋がり、健康維持の活動提供に対する意識が高まったと感じている。

創作活動や余暇活動で自身のやりたいことや自己肯定感や称賛を受けることは、利用者にとって大切なことであるし、笑顔に繋がることだと思う。そのための『健康の大切さ』を考えさせられた一年であった。

（施設長　渡部光行）

地域交流プラザゆうあい

令和6年度を振り返って

大小さまざまな声が聞こえる。今、私のデスクの隣では「サロンすみれいろ」が開催されている。高齢者サロンといえば、どことなく落ち着いた雰囲気でゆったりとした時間が流れているように想像するが、そんなことはない。皆さん元気です。

地域交流プラザゆうあいの主たる目的の一つである地域公益活動は、青梅市社会福祉協議会や地域包括支援センターすみえ、その関係者の方々に協力を頂き、スタートが切れた。その点では前進ではあるが、持ち場が他にある中での活動ゆえに、モチベーションも、活動に使える時間も、持ち場の状況に左右されたように思う。

12月、内省しながら自身の頭の中を一度整理した。プラザゆうあいでやりたいことをA3の紙にまとめてみる。地域特性を基盤に、法人の強みを生かす取り組みを四つの視点で描いてみた。

◇地域公益活動／西分町を中心として

・高齢者サロン・華道教室・フレイル予防体操・栄養士よる栄養教室

◇地域公益活動／地域行事

・青梅大祭・アートフェスタ青梅宿（施設機能の開放、参加弱者への休憩場、授乳場などの支援）

◇地域公益活動／専門性を生かして

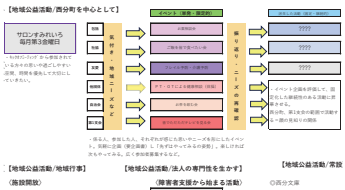
・しゃべり場（精神障がい者等の集い）・アート教室・障がい者を対象とした料理教室

◇地域公益活動／常設による支援

・西分文庫（街中図書室）・トイレ、施設設備の開放（オムツ交換・多目的トイレ等）

令和8年度は地域公益活動全体で70万円の予算を計上し、補助金の申請も行う。「やりたい」のマインドから、「やらなくては」に切り替えていく、そんな思いだ。

さて、持ち場であるグループホームの運営は、一人暮らしに向けた支援として、サテライト型住居を4月に開所する。入居予定者は不安を感じながらも、新たな挑戦に期待もしているようである。法人では2か所目。前回の反省を生かして、将来の生活をイメージし共有すること、未来の支援者と本人を早い段階で繋いでいくことや、通帳を自己管理し、収支イメージを持てるよう支援したいと考えている。


・プラザゆうあいやりたいこと(案)(R6.12.16)
・【地域公益活動/西分町を中心として】
サロンすみれいろ
毎月第3金曜日
・毎月3回ボランティアから参加されている方々の思いや過ごしやすい雰囲気、問題を優先して対応していきたいです。
気付き・地域ニーズなど
相談
支援
関係機関
医療機関
地域住民
・自己肯定感・自己効力感
・ピアサポート
・ピアサポートによる情報収集(相談)
・生きがい
・地域ニーズの掘り起し
取り組み・ニーズの掘り起し
・ボランティア活動・活動・地域活動
・ボランティア活動・活動・地域活動
・ボランティア活動・活動・地域活動

青梅福祉作業所

障害に向かい合っているか

令和6年度を振り返ると知的や発達に障害のある人たちに対して、その障害に向かい合っているかという話を方々でしてきたなと感じています。

目の不自由な人に例えば点字があるように、足の不自由な人に車いすがあるように、耳の不自由な人に手話があるように、知的や発達に障害のある人たちに対しても、その障害に向かい合う対応というものがあるはずです。

特に知的な障害のある大人に対して、子どもに対するような話し方をしている教育・福祉関係等の人たちがとても気になります。その言い方が障害に向かい合っているとは思えないからです。

私が教員採用試験に向けた勉強会を主催していた時（40年も前の話）に中学校入試の算数の問題を解くというものがありました。小学生を対象とした試験問題なので方程式を使わないで解く必要があり、とても難しかったことを覚えています。方程式を学んでいるので方程式の立式ばかり頭に浮かんでしまい、問題を解けなかったからです。

知的な障害のある人たちには小学校四年生の壁というものがあり、分数の計算や数量関係（後の方程式）、百分率でつまずきはじめると言われています。そのため、大人になっても物事を割合的に思考することが苦手です。「多い・少ない」を理解できても、塩梅が難しかったりもします。時間では15分間が4分の1、25パーセントという数概念ができていないために、例えば約束の時間にとても早く到着していたり、家を出なければならない時間からさかのぼって行動することがうまくできなかったりします。

私たち職員の仕事は知的な障害のある人たちにさまざまな事を伝えることでもあるわけですから、百分率的な割合で説明したり、方程式的な組み立てで説得したりしても理解してもらいにくいという自覚をもつことが必要です。ところが先述したように方程式を用いないで問題を解くことと同じように、知的な障害のある人たちへの説明はとても困難なのです。

だからこそ、知的な障害のある人がどのようなプロセスで思考しているかという事を考えないとすれば、目の不自由な人にテキストだけを渡す行為と同じではないかと強く感じるのです。

この一年間、このような話を学校の先生や私が所属しているセルフアドボケイトセッショングループのスタッフ、当所の職員などに話してきました。わかりやすい資料をつくり、わかりやすい説明をしてきたか。いったい私たちは誰に語り掛け、何を伝えようとしているのか。「知的な障害に向かい合っているか」私たちの仕事の本質を考えた一年間でもありました。

（所長　福田和弘）

青梅市障害者就労支援センター

交流の場

青梅市障害者就労支援センターでは、年に2回利用者の交流会を開催しています。第1回目は2009年の12月、クリスマスケーキを食べながら職員によるアコーディオン演奏や利用者に特技を披露してもらう等、クリスマス会のような形で開催しました。

コロナ禍には開催が出来なかった交流会ですが、今年度は8月と12月に開催することを決め、職員一同、企画の段階から、かなりの熱量をもって話し合い、「カラオケ大会」と「ボウリング大会」を実施することに決めました。

8月に開催したカラオケ大会では、事前に好きなジャンルのアンケートを取り、参加者全員が楽しめるように部屋決めをしました。アニメソングで楽しんだチーム、洋楽やK-POPで盛り上がるチーム、J-POPで昔のヒット曲を懐かしむチーム、歌えない人がでないよう皆で一緒に歌う思いやりのあるチームなど、各々の楽しみ方で大いに盛り上がった2時間となりました。初めてのカラオケという利用者もいましたが、機械の操作なども同じ部屋の方が教えてあげながら、皆さん自然にフォローができていてとても素敵な光景でした。終了後のアンケートでは95%の方が大変良かった、良かったと答えてくれました。

12月には、福生市の新東京ダイヤモンドボウルでボウリング大会を開催しました。安全に皆さんが楽しめるよう、下見や打ち合わせを繰り返し、当日を迎えました。チーム分けのため、事前アンケートで通常レーン、ノンガーターレーンの希望を取らせていただきましたが、勘違いしてしまう方が多く、表記の難しさを感じ、上手く伝えきれなかった点は次回の課題となりました。年代、卒業校、職場など考慮しカラオケ大会同様、皆さん楽しめるようにチームを組みました。初めて顔を合わせる方も多く、最初は緊張気味でしたが、身体のほぐれとともに緊張もほぐれ、開始わずかでどのチームにも、利用者のキラキラ光る笑顔がありました。ストライクやスペアが出ると大いに盛り上がり自然とハイタッチ。最後には表彰式も行い、交流会の名の通り、年齢や性別、仕事に関係なく、楽しみを共にしながら、とても良い場となったのではないでしょうか。

WITHコロナで万全の注意を払いながらではありましたが、今まで「当たり前だったこと」が「当たり前ではない」と感じられる今だからこそ、今年度の交流会の意義はとても大きかったと感じます。

次回は26回目。今後も利用者にとって良い交流の場となるような会を企画してまいります。

（相談員　岩﨑博子）

くるるえびす

くるるえびすの目標

渋谷区くるるえびす（以下くるる）に赴任して、もうすぐ2年が経ちます。赴任当初はくるるの環境やコンセプトに感動し、またアート作品の素晴らしさ、それを創り出す職員の支援力、施設全体の和やかな雰囲気に私自身もファンになりました。

今回は今年度の振り返りも含め、赴任1年目に、くるるにて三つの目標を掲げているので、その報告と経過をお伝えします。

令和5年にチーム目標として三つの目標を立てました。一つ目は定員20名を達成すること。二つ目はアート活動の充実、拡充。三つ目は就労との連携になります。

まずは一つ目の定員20名の達成です。まずはここが達成されない限りは支援面でも経営面でも安定できません。定員20名に対して令和5年4月の赴任時は15名でした。今年7月で定員の20名となり目標達成がなされチームで喜んだのを覚えています。ただ稼働率を上げる目標については未だに達成できておりません。毎日の通所が難しい方について何か方法はないか考え、オンラインで自宅と繋いでの音楽活動の提供を始めました。くるるのことを忘れずに通所して欲しいとの思いでの提案です。今後も模索しながら続けていきます。

二つ目はアート活動の充実、拡充です。昨年9月に実施した作品展「くるるアートくるっと見学会」については、大盛況に終わりました。今年は2月に「くるるアートくるっと見学会2」として昨年度よりパワーアップします。その他、昨年度に続き今年度も友愛学園成人部の主催するTシャツ展に参加、はぁとぴあ原宿と共にシブヤフォントの活動へ参加など、アート活動の幅は広がっています。

三つ目は就労事業所との連携です。くるるの特徴として就労との親和性もあり、居場所の選択ということで生活介護から就労に移行希望があれば、全力でフォローしていくことを目標に掲げました。今はまだ道半ばですが、くるると就労事業所と併用している方がおり上手く移行が出来たらと思います。

少しずつ目標が達成されてきており、くるるの目指す目標も変化しています。例えば、これまでは定員20名という場所を目指していましたが、これからは20名のメンバーの幸せを目指していきます。課題は山積していますが優先順位をつけ、チーム一丸となって目標達成を目指します。次年度の渋谷区くるるえびすにご期待下さい。

（副施設長　安藤　健）

はぁとぴあ原宿

『新たな場所で・・・』はぁとぴあマルシェの紹介

はぁとぴあ原宿では、利用者の作品や屋上で採れた野菜などを施設入り口近くで販売する『はぁとぴあマルシェ』をほぼ毎月開催しています。

これに加えて今年度は表参道十字路に『ハラカド』が開業し、障がい者のアート作品を企業等広く社会につなぐ活動をしている『シブヤフォント』が渋谷区の後押しで7階スペースに事務所を開設しました。

シブヤフォントさんとは毎年デザイン制作で懇意にしていただき、「マルシェをやっているならぜひ」とスペースをお貸しいただけることとなり、去年6月と今年1月に2回マルシェを開きました。

令和6年4月に完成したばかりの広々とした真新しいスペースにはぁとぴあ原宿の商品を出来る限り並べさせていただき、いざ開催すると…。

さすが日本が誇る大都会渋谷、施設関係者以外の一般のお客様が、本当にたくさん来ていただきました。

その半分以上が海外のお客様で、日本語が通じない方も多く、職員はつたない英語や身振り手振りでどうにかこうにかやり取りとなりましたが、海外のお客様には藍染や織物など日本を感じさせるものが大好評でした。

そんなマルシェを通じ、障がいを持った人のアートの力を再確認し、引き続き施設利用者と共にアート活動に取り組んでいきたいと思います。

（副主任　杉田　圭）

代々木の杜

代々木の杜　相談支援事業について

2016年に代々木の杜ピア・キッズが開所し、2018年に相談支援事業はスタートしました。当初は、相談支援専門員1名、兼務が1名でしたが、現在は3名で担当しています。主な契約者は、代々木の杜あるいははぁとぴあキッズを利用されている方たちですが、児発や放デイの利用が終了したからといって相談事業所との契約が終わるわけではありません。開所当時は、2歳から小学校4年生くらいの子どもたちばかりでした。そして6年がたち、その子たちは中学生、高校生になってきています。

現在の相談支援事業の課題はいくつかありますが、その一つとして中学から高校という思春期に入った子どもたちの生活全般に関する相談や成人対象の相談支援事業所への移行があります。ピア・キッズの相談員は、就学前の子どもについては多くの相談支援を経験してきていますが、青年期に移行していく時期の子どもたちの課題やニーズに応えていくにはまだ力不足なところがあると感じるときがあります。また、他事業所への引継ぎをいつ、どのようなタイミングで行っていくのが良いのかについても、迷いながら少しずつ動き始めたところです。もう一つの課題は不登校児童の居場所についてです。発達に特性を持つ子どもたちが不登校になるきっかけは、学校という大きな集団の環境で過ごすことに苦痛を感じたり、学習面や友だち関係につまずいたりといろいろです。教育の場でもこの課題について検討されていますが、福祉の場ではもっと広く子どもの生活も含めて、安心して過ごせる居場所探しと発達支援をしていきたいと考えています。しかしながら、不登校となる子どもたちの多くが家から出て、別の場所で過ごすこと自体が難しい場合も多く、既存の福祉サービスでは対応できていないケースもあります。

学齢期の子どもの生活の中心は学校生活になります。学校という集団の中で、子どもたちは学習し、知識と経験を得て生活していく力を付けていくのだと思います。その環境自体に馴染めない子どもたちの学習や経験をどのように保障していけるのか。教育の場との連携や医療との連携も必要になってきます。教育との連携はいつの時代も福祉の課題ですが、障害児・者の相談支援事業自体がまだ教育の現場では十分に知られていないと感じます。子どもの今とこれからをどう考えるのか、子どもにとっての最善の利益はなにかを、子どもに関わるいろいろな方たちとともに考えていけるよう、関係機関との連携に努めていきたいと思います。

（施設長　平井眞琴）

児童部

今年度を振り返って

まもなく令和6年度も終盤に差し掛かり、新年度を前にして、子どもたちは進級、進学、そして児童部から巣立ち新たな環境に向けての準備を進めています。

一年前の話しとなりますが、まず令和6年度のはじめに行ったことは、子どもたちとの面談でした。学校のことや友達のこと、頑張っていること、そして困っていることなど、皆自分の言葉で思い思いに話をしてくれました。中には「インターネット環境を整備して欲しい」など今の社会環境を反映するものも聞かれました。日常生活のことでは、行事や余暇に関することであったり、「おいしいご飯が食べたい」などの要望がありました。

毎年、事業計画を基に施設運営にあたっていますが一番大切なのは、勿論ここで生活をしている児童一人ひとりが日々、充実した生活を送ることです。そのために、今年度も面談で聞かれた子どもからの言葉を常に気に留めながら過ごしてきました。

先の例でいえば、児童個別での余暇外出行事は、コロナウイルス感染が始まるまでは、児童一人ひとりに対して、年間で2回、職員と児童とで相談をして、行き場所を決め、個々で外出をする時間をつくってきました。例えば、スポーツが好きな子どもは、野球やサッカー観戦に行きたいと要望があり、映画や鉄道博物館など様々なアトラクション施設などへの要望もあります。外出は、交通機関の利用や外食をする機会など、子どもたちの社会経験を積むことでも意味のある行事です。

年度当初、余暇を担当する職員たちは、個別外出をコロナ禍の前に戻したいとの思いで、一年をかけて子どもたちの声に寄り添いました。交通機関の利用や普段経験できないビュッフェスタイルでの食事などは、特別感を感じてくれたようです。

また、発語のないなどで、意思の表出が困難な児童については、絵カードなどの視覚的支援を用いるなど、日常の嗜好や生活の様子から、職員たちで、本人の好きそうな場所を選んできました。

また、日常生活の中で、子どもたちが一番楽しみにしているのが食事です。今年度は特に、物価高による食材の高騰が顕著な一年でした。特にお米の値上がりには施設でも頭を悩ましたところです。

職員とも相談をしながら結論としては、他を上手に節約しながら、食事の質は担保しようということにしました。これも年度当初に子どもからの希望を得てのものです。

新しい年度もまた、子どもたちの想いを受け止め、また日々の笑顔を絶やさず生活が送れるよう努力します。

（施設長　石川　淳）

年度の終わりに際して

事務局長　内山　敏

先号のVOL.48は、「意思実現支援」をテーマに発行した。年度末の発行となる今回、改めて「意思」という言葉の意味についてちょっと調べてみた。

「意」は、「心」の上に「音」がある。白川静(1910-2006)の『常用字解（第二版）』によると、この「音」は、どうも神の前に言（神への祈りの言葉や文である祝詞（のりと）を捧げておく）を入れる器である「さい」を神前に置いて祈ると、神は夜間（暗闇）に祝詞（のりと）を入れる器である「さい」の中にかすかな音を立てて神意を示す。その音がなにを意味するかを「おしはかる」、つまり神意をおしはかることを「意」という、らしい（もし、違っていたら申し訳ない）。「かすかな音」だから、聞き取れるか聞き取れないかの微妙な音なのだろう。

VOL.46で理事長が、M・ピカートの「沈黙の世界」の『黙って！あなたの言葉がきこえるように』の言葉を書いているが（土井善晴の「あじつけはせんでいいんです」にもでてきていた）、神とのやりとりでの「かすかな音」であるから、それは耳で聞くもの、聞こえるものではなかったかもしれない。無言の時間、静寂の時間、そこに存在する自分を取り巻く空間、そんな中で「心」で聞き得えるものだったかもしれない。だから、「意」は「気持ち」であり、「考え」であり、「『心』の動き」なのかもしれない。

「思」は、「心」の上に「田」がある。諸説あるようだが、字源からは非常に簡単な説明になってしまうが（これも違っていたら申し訳ない）、「田」は「囟（しん）」（乳児の頭の前兆部の骨と骨の間の隙間、脈搏につれて動く、「ひよめき」と言うらしい）からの変形で、脈を打つ度にひよひよ動く、つまり心臓の動きと直結している。「心」を働かせて「頭」で考えるということのようである。その人が、「こうしよう」「こうしたい」と思う「気持ち」。心の動きを頭で想い描いた状態とも言える。

かたや「意志」となると、想い描いた状態を「成し遂げよう」とそれに向けて具体的な行動に移すという、より積極的な意味合いがでてくる。自分が関わる「利用者の意思」をできるだけ叶えてあげようと考えるとき、そこにはそれと同時に職員自らの「意志」が生まれる。「成し遂げる」ために何をすればいいのか。具体的な行動に移すための「創意工夫」、そのための「新たな情報の収集」、そうしたものが、利用者、職員双方の喜びとなってつながっていくのではないかと思う。

もうひとつ、自浄能力の構築ということについて、考えさせられたことがある。多分、行政への内部通報があったのではないかと推測される案件があった。そのことそのものは問題にするようなことではないが、一抹の淋しさを感じずにはいられない。

利用者の支援等に関して改善した方がよいのではないかとの思いを持ち、日々悩みながら業務をしてきていたからこそ、通報をしたのであろうと思うのだが、各事業所内では、毎月、スタッフ会議が行われている。運営会議も行われている。そうした中、何故、会議において検討事項として提起することができなかったのだろうか。職員間で話し合いをする雰囲気ができていないということなのか、同じ思いを共有する同僚がいないということなのか。

もう四半世紀以上も前のことになってしまうが、当時、「何をしなければいけないのか」ではなく、「『してはいけないこと』を止めなければいけないのではないか」との思いがあり、一枚の書面を提出した。それは、これからの支援を考えたときに、今やっていることを変えていかなければいけないのではないか。そういうことを話し合う場を設定するので同じことを考えている人は自由に集まってくださいという趣旨のものだった。結果的に5名ほどが集まり、夜に5回ほど話し合いを行った。そして、話し合いに参加した職員は、それぞれ勤務しているときにそれまで普通のこととして行っていた「『してはいけないこと』のひとつ」をやらないようにした。その積み重ねをした後、スタッフ会議で提起をし、議論をした結果、長年にわたって当たり前のように行われてきていた「『してはいけないこと』のひとつ」は、解消されるに至った。「たかがひとつのこと」である。しかし、「されど、ひとつのこと」でもある。それまで当たり前のこととして行われてきていたことのおかしさに気づき、そのひとつが動いたことによって少しずつ変化が見られるようになった。

新任職員フォローアップ研修で「自ら考える職員であってほしい」と伝えてきている。これは、新任職員に限った話ではない。目の前にいる利用者に対して自分が何をどうすることがプラスになるのか。おかしいと感じられる支援があるとすれば、それをチーム内で解決しようという姿勢がなければ、チームとしてその支援を認めていることになる。自分はしていないと言ってみても外から見ればしているに等しい。

今年度の重点課題で「事業所内における自浄能力の構築」を掲げたが、これは来年度も継続としなければならない結果となった。その意味では、運営管理への指導が行き届かなかったと自らを反省せざるを得ない。

ひとりごと

事務局長　内山　敏

先に「年度の終わりに際して」として2点ほど書かせていただいたが、ここでは業務から離れて「ひとりごと」として書かせていただくこととする。

人それぞれ、生活習慣というものがあって、なかなかおいそれとそれを変えることは難しい。

私は、基本的に靴下が苦手である。真冬であってもちょっと出かけるだけなら、裸足にサンダル履きである。「ちょっと」の範囲には、私の生活圏であれば、日の出や武蔵村山のイオンモールも含まれる。それなりの人が来店する場所でもあるので、「何、あの人？　大丈夫？」とおかしな人扱いで見られている可能性は大いにある。もし見かけるようなことがあったら、そっとしておいてもらいたい。

2年ほど前から足で身体を揉みほぐすフーレセラピーの店に通っていたが、残念ながら閉店となってしまい、台湾式マッサージと足つぼの店に半年ほど前から行き始めた。当然、裸足にサンダル履きで行く。毎回、足つぼをやってもらうのだが、これが悲鳴を上げるくらい痛い！　同じ箇所が、である。それだけ該当する身体の部位が悪いということである。そして、2回目だったか3回目だったかに言われた。「足は第二の心臓、靴下嫌いでも履かないとダメ！　冬に裸足はダメ！」。真面目な顔で言われた。

12年ほど前から、年明けに車を走らせて柳沢峠に富士山を見に行っている。標高は、1,472メートルである。であるから、気温は氷点下である。だが、当然のことながら、裸足にサンダル履きである。ここまでくれば、「ただのものぐさ」と言われても仕方あるまい。

しかしながら、この年末年始は、ひどい咳に見舞われて一晩中寝られないし、胸は痛いしでほとほと参った。今年は諦めるかとも思ったが、やはり「行かねばなるまい」と行ってきた。その場にいる時間は、たかだか2～3分である。しかし、今年はそういう状態にあったことと、先述の「冬に裸足はダメ！」のお言葉をしかと受け止めて靴下を履き、スニーカーを履いて出かけることとした。その日の柳沢峠からの富士山である。

令和六年度 寄付者御芳名

五十嵐清・五十嵐肇・石田健太郎・伊藤正直・宇佐美敏郎・NPO法人にこにこ・榎戸俊行・榎戸靖宏・榎本由一・大野志乃・金子信也・金嶽憲義・河津英彦・木森慶蔵・(株)協立防災工業・桐生麻里子・窪寺眞章・熊木正則・倉川かずえ・黒米博・小林弘政・小嶺勝彦・小宮山義二・金野保子・坂元昌子・佐藤登美子・(有)佐藤工業・塩浦敏宏・島崎ツル子・(有)島田鈑金塗装・(社団)昭和会館・白井秀明・須田恵美・(株)青和施設工業所・大道正男・高山國男・(株)田中染色工業・(有)多摩自家用・柘植吉治・デンソーグループはあとふる基金・東京善意銀行・東京武尊会九十九園・東京都清涼飲料協同組合・TOKIさんファン・なかま亭・成木一丁目自治会・成木二丁目自治会・(有)野口商店・ノーリツぬくもり財団・平地敏真・福田和弘・松田京子・三ツ橋茂男・(有)村松保険サービス・本山美八郎・山川勇・山本以文・横山順子・吉岡正夫・吉岡信子・(株)四谷モータース・(株)リハーツ・青梅福祉作業所保護者会梅の実・成人部保護者会

（順不同・敬称略）

皆様からお寄せいただきましたご支援、ご協力に厚く御礼申し上げます。他にも多くの方々から、子供たちへのお菓子やおもちゃ等のたくさんのお心遣いをいただいております。心より感謝申し上げます。

福作 報告

新年懇親会

今年の仕事始めは、例年より遅く1月6日でした。午前中は通常の作業をして、午後に利用者の皆さんの希望で初詣＋書初め・映画鑑賞・室内レクレーションの各グループに分かれて楽しいひと時を過ごしてもらいました。そして、63名全員が食堂に集まって懇親会が開催されました。

今年は二十歳の祝いは対象者がいなかったため、恒例の各部署、各作業の年間の表彰式があり、表彰された方は受け取った賞状を誇らしげに掲げたりしていました。

所長の手書きの新年メッセージが63名一人一人に手渡され、各々自分へのメッセージに見入っていました。お茶やお菓子をいただきながら今年、目指すことなど皆さんで確認して懇親会が終わりました。

プラザ 紹介

すてっぷ小中尾新年会にて

令和7年元旦、地域交流スペースゆうあい多目的室にて、グループホーム合同の新年会を行いました。タイミングよく、地元西分町の獅子舞も来訪され、頭をガブリっと噛みつかれ、みな笑顔になりました。その他にも1月12日はだるま市、2月16日は青梅マラソン、5月には青梅大祭と青梅の街中は催しがたくさんあり、一年を通して楽しめそうです。また多目的室では地域の方々のサロン活動や一時休憩所としての開放も行っています。近日西分文庫（読書スペース、図書の貸出等）を予定しております。

渋谷 報告

電子ピアノ寄贈

公益社団法人東京都宅地建物取引業協会渋谷区支部様より電子ピアノを寄贈いただきました。

大切に使わせて頂きます。

ありがとうございました。

児童 報告

プレゼントのお礼

昨年のクリスマスでは、企業様をはじめ、全国の方々からお菓子やおもちゃなど児童部の子どもたちへ沢山のプレゼントを頂戴しました。

どれもこれも児童が喜ぶものばかりで大切に使わせて頂きます。この場を借りて御礼いたします。

成人 報告

青梅マラソンで使用されました

成人部生活介護利用者の片桐成（かたぎりじょう）さんの作品が、2月に開催された第57回青梅マラソンの入賞者への賞状用クリアーファイルのデザインに使用されました。配布数は58枚、入賞者だけに配布されるレアなクリアーケースです。

編集後記

編集作業をしているのが未だ2月。今日まで、まだ東京では、まとまった雪は降っていないが、例年になく体感的に非常に寒く感じる日が続いている。そう言えば、私たちのところでは「雪かき」という言葉を使うが、過去に北海道で生活していた時期があり、そちらでは「雪をはねる」（雪はね）と表現をしていたのを思い出した。はじめは、何のことかと思ったが、聞けば「さらさらな雪をスコップなどで跳ね飛ばす」から来ているとか。気になったので調べると秋田地方では「雪よせ」、北陸などでは「雪すかし」などの言葉が出て来た。その土地によっての降る量や質によって、表現の仕方がおもしろいと感じる。正直、寒いのは苦手なので春が待ち遠しく、今ＨＯＴな原稿を編集中。